

ひとめぐり

きらめき人

「運ぶ」で町に貢献したい！新社会人の一歩。

春

の訪れとともに南三陸町でも新社会人が新たな一歩を踏み出している。有限会社山藤運輸に入社した佐藤利輝さんその一人だ。登米市豊里出身の佐藤さん。高校は志津川高校の情報ビジネス科に進学。実家が農家で、小さいときから自然に親しんでいたことから、高校では自然科学部に入り南三陸の自然の調査や発表などを行ってきた。

山藤運輸との出会いは高校2年生の時に行われた、町内の企業が集う出前企業紹介事業のこと。「もともと車が好きだったので運送業には興味がありました。さらに、部活動で南三陸BIOのバイオガスの実験などに関わっていたこともあり、山藤運輸が液体肥料の散布も行っていることを聞き、とても興味を持ちました」と話す。卒業後、実家のある登米市での運送業なども考えたというが、最終的に南三陸での就職を希望したのも、単なる運送業ではなく、液肥運搬など町の事業との関わりも大きな要因だったと振り返る。

入社後すぐに先輩社員に同行して宅配業務で地域を回り始めた。「実際に仕事をしてみると覚えることが本当にたくさんあるな、と。地元出身ではないので、まずは地名も覚えなきゃいけないですね。『物流は地域の血液』と社長も話しているように、地域において重要な役割の一端を担っているという責任を持ってやっていきたい」と意気込んでいる。

RIKI SATO



マイカーはマニュアルの四駆に乗っている佐藤さん。「納車のときはうれしくてたまらなかった。休みの日はドライブに行っています！」と話す。

佐藤利輝さん



29歳で仲間8人と鉄工所を起業、工場長として東北各地へ出向き営業に歩いた。社交的な性格と地域の良さを伝える話術は、現在の活動(おもてなしスマイルガイド)の基礎になっている。

CHOUKI ABE

阿部 長記さん

「震災は辛かったな。でも今は、新しい町で楽しんでいるよ」

東

日本大震災で町が壊滅状態となったその年の5月、初めて開催された『復興市』で、被災体験や避難生活の様子を来場者に話した阿部長記さん。生まれも育ちも南三陸町志津川。誰よりも町を知っており、以前から土日限定の観光ガイドをしていたので、地域を案内するのは慣れたものと自負していた。しかし、さすがにあの惨状を目撃した後では、涙が溢れてうまく話す事が出来なかったという。

避難先の旭ヶ丘コミュニティセンターで、転倒した高齢者を介抱したが十分な手当でできなかったこと、トイレの確保にも苦労したことなどから、語り部として「普段から備えや心構えが大事だ」と力説する。

支援に訪れた方々からアドバイスを頂き、現在も交流を続けている。せめてもの恩返しにと震災語り部として体験談や想いを語る。「新しい町(中央団地)で暮らすようになってからは、若い人や高齢者が一緒に楽しく生活できるよう考えるようになった。仕事は80歳で辞めたが、夫婦そろって健康なので近くの小学校前で登下校の見守りをしたり、家庭菜園も楽しんでいるよ」と胸を張る。また、顔見知りになった近所の方々と『仲良し会』というサークルを立ち上げて、温泉や園芸センターなどへの小旅行も楽しんでいると満面の笑みで語った。